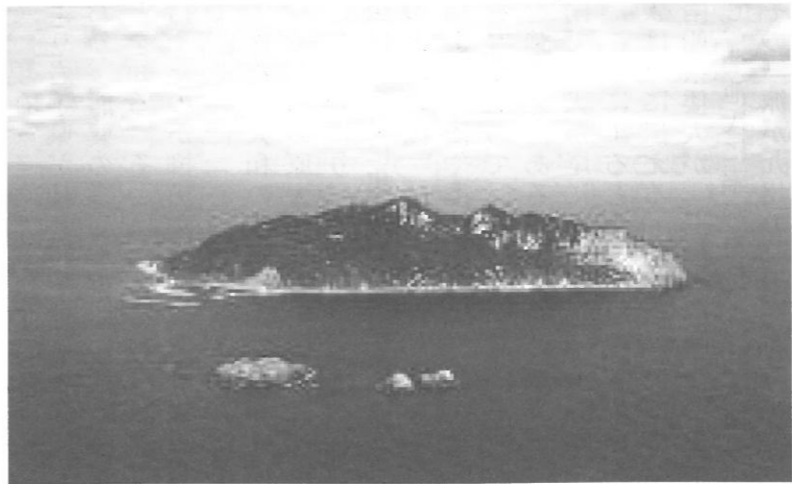


「三小島」をなくせばいいのではないかという考え方もあるが、古事記の神話改ざん方法(そもそも大八洲を最初に産んだというくだりが改ざんだと思う)を見てみると、おそらく「削除」という方法はとっていない。全て書き足しているのだ。島の亦の名を全て残しているからだ。『言霊』を信仰した日本人である。「削除」するよりなるべく少なく書き足す(「一」だけ書き足せばいい)方が、改ざんによる「祟り」が起きないと考えたのではないか。

しかし、もしかしたら、そもそも沖の三小島は、このどちらでもない可能性もある。では、どこかというところ、玄界島のすぐとなりにある、大机島と

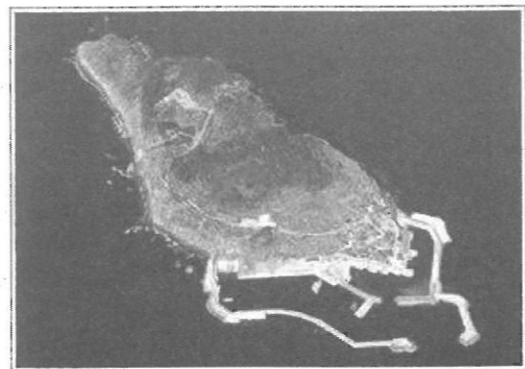


(左) 柱島ウイキペディアより 右: 大机・小机島 ブログ気ままな車内泊一人旅 II より 転載)

子机島と柱島である。つまり、博多湾岸(生の松原や小戸神社)から見て沖にある三小島である。今まで書いたように、これだけ博多湾や玄界灘周辺の島々がでてくることを考えるなら、充分考慮していいのではないか。実際、糸島半島の灘山頂上から博多湾を眺めたとき、遠くの相島や大島に比べて、この三小島は充分な存在感をもって眼前に存在しているのだ。博多湾の出入り口にあたるところにこれらの小島を神格化した可能性はあるのではないだろうか。(左) 柱島ウイキペディアより 右: 大机・小机島 ブログ気ままな車内泊一人旅 II より 転載)

「天つ神諸(もろもろ)の命(みこと) 以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多陀用弊流国(ただよえるくに)を修め理(つく)り固め成せ。」と詔(の)りて、天の沼矛(ぬぼこ)を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして面きたまへば、塩許々表々呂々邇(しをころころに)画き鳴して引き上げたまふ時、其の矛の末(さき)より垂(した)たり落つる塩、累なり積もりて島と成りき。是れ、淤能基呂(おのこのしま)島なり。」

小呂島は古来、「大蛇島(おろちじま)」、「於露島」などの表記も見られるが、江戸時代もつとも一般的な表記だったのが、「於呂島」という表記である。また、能古島は「残」「能許」「能挙」「乃古」とも記載され一定して



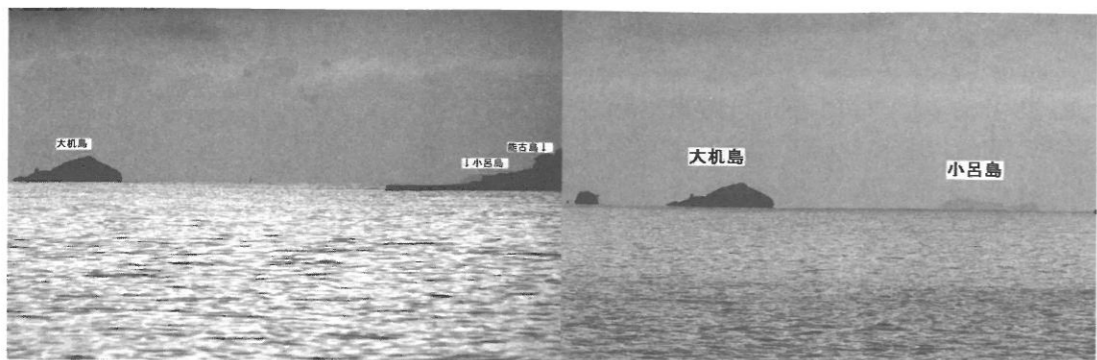
ミ神の国産み神話は、老岐(天比登都柱)を攻略するため、イザナギ軍とイザナミ軍による老岐水軍を挟み撃ちした史実が神話となった可能性があると考えている(この点の考について

は後日にしたい)。

渡来軍が最初に「小呂島」を制圧、次に「老岐島」を制圧し、玄界灘の島々を次々攻略したと考えるのなら、渡来勢力の一軍が能古(ノコ)島に拠点を構えたと考えてもおかしくはない。

なぜなら、能古島は博多湾の中心にあつて、水軍で博多をおさえるのにはうつつけの場所だからである。そもそも「このしま」の語源が、渡来軍団が糸島もしくは博多の政情が安定するまで「残った」ためについたとも考えられるのだ。まるで、アフガニスタンやイラクの米軍のように。そして「老岐」を制圧後、「能古島」を制圧し、そのまま残った軍団が、おそらくイザナギ神の軍であろうと思つている。なぜなら、イザナギ神が黄泉の国から逃げ帰り、禊をした場所とされる「小戸」が能古島の対岸にあり、ここに小戸神社があるからだ。しかも小戸神社(福岡市西区小戸)の位置であるが、ちょうど小呂島と能古島が重なつて見えるところに存在している。

能古島の西端とはるか四〇km先の小呂島が重なつているのである。これは、数百mはなれた小戸ヨットハーバーから見たのでは重ならない。小戸神社の海岸から見たときのみ、一島が重なるのだ。これは、淤能基呂島が小呂島+能古島であったことを暗示しているのではないだろうか。また、神社での「お祓い」の時に唱えられる「祓詞」にて「筑紫の日向の橋の小門(おど)の阿波岐原」という一つ一つの地名は、ほとんど福岡市内にある地名と酷似している。



(写真左: 小戸神社の海岸から見た大机島と小呂島と能古島 写真右: 小戸ヨットハーバーから見た大机島と小呂島)

日向といえ普通、宮崎が頭に浮かぶが、福岡市西区にも日向峠や日向川の地名はある。橋(たちばな)は東区に立花山の名がある。一方、考古学的な証拠からは、宮崎が古代天皇家と関わりをもつようになるのは、もつと後の時代と考えられるのだ。弥生時代以前の有力首長の存在を示す遺跡がほとんどみつからないからだ。

やはり、福岡市の西区の小戸神社の方が、イザナギ神が禊をした場所と考えて整合性が高い。やはり能古島(博多湾)にイザナギ神の軍がいた方がふさわしいようだ。

そして一方、イザナミ神の軍は「小呂島」に駐屯したのではないか。小呂島に軍団がいれば、一度制圧した老岐で反乱が起これば急行できるし、博多のイザナギ神軍の救援にも都合がいい。

また、イザナミ神は女性であるから巫女だった可能性がある。呪術に必要なアジマサ(ピロウ)は小呂島にあるのだからイザナミ神は小呂島にいたほうが良いということだ。

小呂島七社神社には、沖ノ島と同様に古代天皇制において最も神聖視されたアジマサ(ピロウ)が自生している。アジマサ(ピロウ)は、現在でも天皇の代替わりのときの大嘗祭においては、ピロウの葉で屋根を葺いた百子帳で禊をおこなうというほど重要な植物だ。

小呂島の七社神社参道は九州最北端のピロウ自生地である平戸口の野田熊野神社に向いており、古代においてピロウが野田熊野神社から小呂島に移植された可能性をいしている。しかし、逆に小呂島から野田熊野神社に移植されたことだって考えられないことではない。もしかしたら、もともと小呂島にピロウが自生していたのなら、渡来軍が小呂島を獲得したかった一つの大きな動機となりえる。アジマサ(ピロウ)は古来風を起す呪具としてその力を信じられており、ピロウの葉は扇の原型であろうという説も

ない。能基島でも「このしま」と呼べそうだ。であるなら、淤能基呂(オノゴロ)島+小呂島+能古島ではないかという推論は、以前からあつたようである。この説をとつて、以前小呂小学校と能古小学校の児童で合同劇が発表されたこともあつたそうだ。

ある。古代の海戦は風の方向が勝敗を決することはいうまでもないこと、風を起す呪術に必要不可欠だったことは容易に想像できるからだ。また、ここまでの推理が正しいなら、古事記に従うならイザナミ神の墓所は、小呂島にある可能性がある。イザナミが淤能基呂島から出ていった形跡を古事記の神話から見出せないからだ。

小呂島の頂上宮岳ちかくにある嶽宮神社の周辺は、テール型支石墓とおぼしき巨岩や、対馬白嶽や香椎宮などに向いておられると思われる石列や石垣、小呂小中学校裏の向山には真北に向いて並んでいる埋め込み石列や、古墳ではないかと思われる小山、支石墓らしき石組みなどがあるが、島の方に聞いても遺跡調査されたという話は聞いたことがないとのことである。

また、小呂島山頂の嶽宮神社の主祭神は、イザナギ尊であるがその他二柱の神が祭神である。なんと、その二柱とは速玉男尊と事解男尊であり、両神とも死霊と化したイザナミをイザナギが黄泉平坂で縁切りしたときに現れた神である。死霊イザナミ神を封じる強い意志を感じることができ

オノゴロ島をつくる時、海を矛で「こおろこおろ」掻き回すとあるが、これも小呂島に由来があると考えられる。小呂島に「御手水」という地名がついているところがある。海岸から二〇mほどの高さの崖なのだが、海に向かつて開く、すり鉢状の地形をしてい

ない。能基島でも「このしま」と呼べそうだ。であるなら、淤能基呂(オノゴロ)島+小呂島+能古島ではないかという推論は、以前からあつたようである。この説をとつて、以前小呂小学校と能古小学校の児童で合同劇が発表されたこともあつたそうだ。